

五重塔

国宝

南アジアや東南アジアではストゥーパと呼ばれる仏塔は、元来は墓の塚を起源とする建築物である。仏陀釈迦牟尼の遺物を納めるための建物であり、現世における仏陀の教えの存在を思い起こさせるための役割を果たす。

興福寺の五重塔が最初に建設されたのは730年で、光明皇后（701～760年）の命によりつくられた。光明皇后は興福寺の創設者である藤原不比等（659～720年）の娘である。長い歴史を通じて、五重塔は5回も火災に遭い、現在の塔は1426年に建てられたものである。高さは50.1メートルで、日本に現存する木造の塔としては2番目の高さである。深い軒で有名で、奈良時代（710～794年）の建築を参照しつつ、室町時代（1136～1573年）のダイナミックな建築様式を巧みに融合させている。

五重塔には四方四仏の像が収められており、それぞれに2体の菩薩像が脇侍として設置されている。これは、大乘仏教の時間と空間の概念を表現している。南北の軸は時間の経過を表し、過去の仏陀である釈迦は北面に、未来の仏陀である弥勒は南面に据えられている。一方、東西の軸は空間を表し、西方極楽浄土の仏陀である阿彌陀は西面に、東方浄瑠璃浄土の仏陀である薬師は東面に据えられている。南北と東西の軸が交わるところが現世である。ここに中心の柱があり、この柱は石の土台の上に立っている。仏舎利がここかまたは別の場所に埋められているかは不明である。